

『ポニーを活用した教育実践』

埼玉県立深谷はばたき特別支援学校
ポニー 共 育 推 進 委 員 会

1 本校について

深谷はばたき特別支援学校は、知的障害のある児童生徒数の増加に伴った特別支援学校の教室不足解消を図るため、旧川本高等学校の跡地を利用して、平成23年4月に開校した知的障害特別支援学校である。熊谷市及び深谷市の一部並びに寄居町を通学区域とし、開校時には185名だった児童生徒数も、6年目を迎えた本年度は270名（平成28年5月1日現在）まで在籍者数が増えている。学校教育目標に「笑顔、かがやき、そして未来へ」を掲げ、日々の教育活動を通じて「はじける笑顔」と「明るいあいさつ」のできる児童生徒の育成を目指している。

2 ポニーの紹介

本校の特色の一つとして開校時からポニーを飼育していることがあげられる。特別支援学校でポニーを飼育するのは全国初の試みである。

本校で飼育しているポニーは、メスの「メロン」で、2006年に北海道で生まれ、4歳で本校にやっできて、今年の5月20日で10歳を迎えた。体高（首の付け根までの高さ）が125cmありポニーとしては比較的大きい部類に入る（体高が147cm以下の馬のことをポニーと呼ぶ）。人懐っこい性格で、本校のアイドル的な存在として児童生徒や教職員、近隣の地域住民などから親しまれている。

今回の教育実践報告では、本校で飼育しているポニーを活用した教育実践の充実に向けて、開校から現在まで取り組んできた活動の中身を紹介したい。また、今後の課題や展望などをまとめることで、実践報告としたい。



本校の敷地内で飼育しているポニーの「メロン」

3 ポニーを活用した教育実践の取組

(1) 開校当初（平成23年度）

【飼育体制】開校当初はポニーの飼育に関して詳しい教職員が皆無に等しい状況で、飼育の方法や体制整備をどのようにするべきかを試行錯誤しながら模索していく毎日であった。ポニーを教育活動に生かすために「ポニー共育推進委員会（以下、「委員会」と表記する）」という組織を立ち上げ、この委員会が中心となってポニーの飼育体制や活用方法の検討を進めることとなった。

ポニーの飼育作業

- ① 餌やり・・・チモシーと呼ばれる乾草を与える
- ② 水替え・・・飲み水用の水を入れ替える
- ③ ボロ掃除・・・ボロ（馬糞）を始末する
- ④ ブラッシング・・・ブラシをかけて埃を取り除く
- ⑤ 裏堀り・・・蹄の裏の土や埃を取り除く
- ⑥ 蹄油塗り・・・蹄の保護・防水の油を塗る
- ⑦ 検温・・・体温を図って健康チェックをする

ポニーの飼育作業は餌やりや水替え、ボロ掃除などがあり、これを1日に2～3回行わなくてはならず、日々の飼育を8人の委員だけで賄うことは非常に大きな負担となった。そこで、有志を募って飼育を担当する教職員を増やし、総勢20人程度で当番日を割り振って世話をするようにした。

また、ポニーの飼育について関心はあるけれど扱いに慣れていない教職員は、夏季休業中に東京都の代々木にあるポニー公園に行き、そこでポニ

一の扱い方や世話の方法を学び、飼育技術の向上に努めた。

【教育実践の様子】開校当初のポニーを活用した教育実践としては、ポニーの扱いに慣れた教員が担任する学年の児童生徒達がニンジンやリンゴなどのおやつあげ体験をしたり、高等部の生徒達が昼に輪番で餌やりや水替え、ボロ掃除、ブラッシングなどの世話をしたりする程度であった。言うならば、有志による飼育を一部の児童生徒に手伝ってもらっていた状況である。

【学校全体への波及】前述のとおり、ポニーのメロンは本校のアイドル的な存在なので、教育実践以外にも登場する機会が多い。文化祭の名称はメロンにちなんで「メロンフェスティバル」と呼ばれている。また、学校ホームページに「メロンのつぶやき」というページを設け、まるでメロンが語り掛けているような文章で、その日に行った学習活動の様子を情報公開した。さらに、メロンをモチーフにした「メロンTシャツ」「メロンポロシャツ」などを作って教職員向けに販売を行った。

(2) 開校2～3年目（平成24～25年度）

【飼育体制】2年目を迎えたときの飼育体制は、新転任者を含めた有志が30人程度に増加した。また、飼育場を囲う柵の工事を行い、飼育環境を整備した。さらに、ポニーを有効に活用する方法を学ぶために「治療的乗馬研究集会」などの勉強会に積極的に参加するように努めた。年度末には、長期的なビジョンから飼育体制を確保するために、委員会と有志のみによる飼育から、全教職員による飼育に変更したいと職員会議で提案し、3年目からは全教職員で飼育する体制が整った。

【教育実践の様子】開校2年目になるとポニーの扱いに慣れた教職員も増え、児童生徒がポニーと関わる機会も増えた。また、何とかして児童生徒達に乗馬の体験をさせることができないかと検討するようになった。乗馬を実施するにあたり一

番注意しなければならないことは、何といたっても安全面の確保である。安全に乗馬を実施するためには、少なくともポニーに繋いだロープを引いて誘導する役割（リーダー）の人が1名と、騎乗者の両脇にいて落ちないように姿勢などを補助する役割（サイドウォーカー）が2名必要となる。それ以外にも騎乗を待っている児童生徒を見守る教職員なども必要となる。しかし、通常の指導体制ではなかなかそこまで手厚い人員を充てることは難しいのが実情であった。そこで、まず取り組んだことは、校内宿泊学習の際に、他の児童生徒が下校した後、宿泊する児童達だけを乗馬させる試みだった。また、本校の通学区域に在住する発達に気掛かりのある幼児を対象とした「親子教室」という学習会を放課後に実施しており、その親子教室の活動にもポニーを活用し、参加している幼児達に乗馬や触れ合いなどの体験を試みた。こうして、教職員の体制が整えられる時間帯に限定して乗馬する活動も取り入れるようにした。さらに、開校3年目になると、これまで関わりの浅かった中学部の生徒達が自立活動（特別支援教育における独自の学習内容）の授業の中でポニーを取り入れるようになった。

【中学部 ポニーを活用した自立活動の授業】

○主題名

「相手(ポニー)の動きに合わせて一緒に動こう」

○学習のねらい

- ・相手(ポニー)の動きを受け、一緒に動く。
- ・相手(ポニー)が嫌がらない力加減を知る。

【学校全体への波及】学校行事に関連しては、開校2年目にメロンをモチーフにしたゆるキャラ「メロリン」が誕生し、教職員の手作りによる着ぐるみを作成した。メロリンは文化祭（メロンフェスティバル）を中心とした学校行事にしばしば登場し、児童生徒達を楽しませている。また、開校3年目からはメロリンをゆるキャラグランプリ

にもエントリーして、学校のPRにも一役買うようになった。さらに、このメロリンをモチーフにした「メロリンTシャツ」「メロリンポロシャツ」などを作って、



本校のゆるキャラ「メロリン」

教職員に加えて児童生徒や保護者にも販売した。

(3) 開校4～5年目(平成26～27年度)

【飼育体制】全教職員で飼育する体制は継続して実施され、開校4年目からは夏季休業中の約1ヶ月半の間、特別な調教をしてもらえることになった。これは、本校の学校評価懇話会委員でもある深野聡氏のご好意によって実現したものである。特別な調教に行くことを本校では「メロンの武者修行」と呼んでいる。人間の指示に従って行動できるように厳しい武者修行を行い、それを終えて帰ってきたメロンは、それまで自由奔放でおてんばだった姿から、素直で聞き分けの良いポニーへと大変身していた。人間の指示に従えるということは、乗馬をはじめとするポニーを活用した教育活動を安全に実施する際に、とても重要な条件となる。人間の指示や命令に素直に従えるように成長したメロンは、教育活動の中でより活躍できる場が広がったと言える。この成長した良い状態を維持できるように、武者修行以降も委員会が中心となって引き馬や調馬策などの調教を毎日欠かさず取り組むように努めた。

【教育実践の様子】開校して4年目になり、小学部低学年に在籍し、ポニーを扱う技術を有した教員が、受け持ちの自立活動の授業の中でおやつあげやボロ掃除などの世話を継続的に取り組む教育実践を始めた。小学部低学年の児童達にとっては自分の体よりはるかに大きい動物と関わることになるので、始めのうちはポニーに対して怖がったり触れることを嫌がったりする児童もいたが、継続した学習の積み重ねの結果、学習グループの児

童全員がポニーに直接触れることができるようになり、自主的に世話を行えるようになった。それまで「できなかった」ことが「できる」ようになってくると、児童達の顔つきも自信のある表情に変わっていくのが読み取れた。さらに翌年には、同じ自立活動の授業において担外の教員の協力を得ながらの乗馬に挑戦した。この学習を始めた頃は、ポニーに乗ることが大好きで順番を待つことが難しい児童やポニーに乗ったときの高さや不安定さに抵抗感を示す児童など様々であったが、2～3ヶ月の継続した学習の積み重ねの結果、順番や約束を守れるようになり、怖がることなく乗馬し、自分で姿勢調節ができるようになった。

高等部の生徒達による昼の世話では、生徒一人一人に「生き物を育てる」という自覚と責任感が涵養され、相手(ポニー)のことを思いやるような発言や態度が多くなった。社会性やコミュニケーションに課題のある自閉症の生徒達にとっては、このような変化はとても大きな成長であった。

小学部 ポニーを活用した自立活動の授業

○主題名

「ポニーと一緒に活動しよう」

○学習のねらい

- ・約束や順番を守り、落ち着いて行動する。
- ・乗馬を通して学習につながる姿勢を身に付ける。

【学校全体への波及】開校時から3年目までの文化祭では、「メロンフェスティバル」と呼ばれていることもあり、「メロン触れ合い体験コーナー」という企画を実施して、来場者にニンジンやリンゴなどのおやつあげ体験を行っていたが、4年目からはメロンが人間の指示に素直に従えるようになったこともあり、「メロン触れ合い体験コーナー」では乗馬体験を取り入れることにした。このときも学校評価懇話会委員である深野聡氏の協力を得て、安全に事故なく乗馬体験を実施することができた。乗馬を体験した来場者からは普段ではあま

り味わえない貴重な体験ができたことに満足そうな笑みを見ることができた。

4 今後の課題と展望

開校から5年間で教育実践全般における確かな基礎固めを経た本校は、10周年という節目に向けて大きく成長・充実させていく時期にきている。ポニーを活用した教育実践においても同様に、より一層充実した教育活動ができるよう邁進していきたく考えている。そこで、今後の課題点と改善点をあげてみる。

【飼育体制】全教職員による飼育体制が継続されており、今後も多くの教職員が飼育技術を向上させるとともに、ポニーを教育活動に活用できるよう、研修などを充実させる必要がある。また、高等部生徒による昼の世話が定着しているが、校外行事などで高等部の生徒が不在のときに、他学部の児童生徒が昼の世話をを行うような仕組みを整えられるように工夫したい。また、開校から5年が経ち、馬房や飼育場を囲む柵が劣化してきている。ポニーの平均寿命は30歳ということを考慮し、安全に飼育できるように中長期的な視点に立って改修などを行い、環境を整備していく必要がある。

【教育実践の充実】教育実践としては通常の授業の中でポニーを活用する場面をもっと増やしていくことが重要である。現段階では、多くの教職員がポニーを授業に活用するまでの技術を有していないため、ポニーの扱いに長けた教職員に協力をあおいでいる状況である。ポニーを教材として活用することのできる教職員を増やして、クラスや学年の教職員だけでポニーを安全に扱えるようになれば、通常の授業において活用機会の増加につながると思う。また、ポニーを介して全校生徒の交流が深まるような場を企画したいと考えている。学部間を超えて合同の授業を行ったり、全校集会を催したりできれば、ポニーを活用する手段がもっと広がるだろう。さらに、ポニーを活用

した授業における評価方法も工夫が必要である。児童生徒達が「意欲的に取り組めた」「楽しそうに乗馬できた」「ポニーと関わる中で笑顔が増えた」という評価では、客観性が乏しく具体的で妥当性のある評価だとは言えない。つまり、その学習効果を客観的に測定できる評価指標が必要だと考える。そこで、委員会では、具体性・妥当性・客観性のある評価指標を作ろうという動きになり、議論を重ねて「ポニーを活用した学習活動 チェックリスト」という指標を作成した。今後は、ポニーを活用した教育活動を、この指標に基づいて効果的な評価ができるように検証を重ねていきたい。

委員会メンバーで作成した「ポニーを活用した学習活動 チェックリスト」

【学校全体への波及】文化祭での「メロン触れ合い体験コーナー」では、開校4～5年目で乗馬体験を実施し、そのことは来場者からも好評だったものの、今年度は教職員の体制が整わない等の理由から乗馬体験は実施せず、ニンジンやリンゴなどのおやつあげのみを行う計画である。今年度は乗馬体験を見送る方向だが、来年度以降は再び乗馬体験を実施できるように体制を整備したい。また、近隣の地域住民の方々々がメロンと触れ合える機会を設けるなど、本校の特色ある教育活動をPRする手段としての活用方法も検討課題である。

【参考資料】

ポニーを活用した学習活動 チェックリスト

区分	学習効果	回数 日付	評価				
			1回目	2回目	3回目	4回目	5回目
1 健康の保持	(1) 生活のリズムや生活習慣の形成に関すること。 (2) 病気の状態の理解と生活管理に関すること。 (3) 身体各部の状態の理解と養護に関すること。 (4) 健康状態の維持・改善に関すること。		/	/	/	/	/
	○ポニーとのかかわりを楽しみに意欲的に登校できるようになったか？						
	○ポニーとかわることを通して生活リズムが安定したか？						
	○乗馬したことで便秘の解消につながったか？						
2 心理的な安定	(1) 情緒の安定に関すること。 (2) 状況の理解と変化への対応に関すること。 (3) 障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲に関すること。						
	○動物への苦手意識が低減したか？						
	○ポニーとのかかわりが好きになり、興味・関心が広がったか？						
	○乗馬などの体験で自信や自尊感情が高まったか？ ○ストレスやパニックを抑制・沈静する手段としてポニーとのかかわりが有効か？						
3 人間関係の形成	(1) 他者とのかかわりの基礎に関すること。 (2) 他者の意図や感情の理解に関すること。 (3) 自己の理解と行動の調整に関すること。 (4) 集団への参加の基礎に関すること。						
	○他者(ポニー)への興味・関心が高まった？						
	○他者(ポニー)の行動や気持ちを推し量って考えるようになったか？						
	○ポニーの嫌がる行動をやらなくなったか？						
	○他者(ポニー)への興味・関心が他者(人)への興味の拡大につながったか？						
	○集団でポニーにかかわる際の約束を守るようになったか？ ○集団でポニーにかかわる際に、自分の役割を責任もって果たせたか？						
4 環境の把握	(1) 保有する感覚の活用に関すること。 (2) 感覚や認知の特性への対応に関すること。 (3) 感覚の補助及び代行手段の活用に関すること。 (4) 感覚を総合的に活用した周囲の状況の把握に関すること。 (5) 認知や行動の手掛かりとなる概念の形成に関すること。						
	○ポニーに触れることを心地よく感じながら触れられたか？						
	○乗馬したときの前庭覚刺激(揺れ、高さ、スピード)を楽しめたか？						
	○バランスをとりながら乗馬し、行き先や目的物を見ることができたか？ ○内転筋や脊柱起立筋などでバランスをとりつつ、両手を協応させて手綱を持てたか？						
5 身体の動き	(1) 姿勢と運動・動作の基本的技能に関すること。 (2) 姿勢保持と運動・動作の補助的手段の活用に関すること。 (3) 日常生活に必要な基本動作に関すること。 (4) 身体の移動能力に関すること。 (5) 作業の円滑な遂行に関すること。						
	○乗馬したことで股関節や肩関節などの可動域が広がった？						
	○乗馬したことで過度な筋緊張が抜け、リラックスすることができたか？						
	○乗馬したことで姿勢保持力が高まり、姿勢が安定するようになったか？						
	○おやつを用意する際に、安全に包丁やナイフを扱えたか？ ○ボロ捨ての際に、一輪車をバランスよく押して運ぶことができたか？						
6 コミュニケーション	(1) コミュニケーションの基礎的能力に関すること。 (2) 言語の受容と表出に関すること。 (3) 言語の形成と活用に関すること。 (4) コミュニケーション手段の選択と活用に関すること。 (5) 状況に応じたコミュニケーションに関すること。						
	○教員の指示を聞いて理解し、安全にポニーとかわられたか？						
	○ポニーに挨拶やお礼などを話し掛けることができたか？						

※評価欄の記入 効果があった：◎ 変化の兆しがあった：○ 変化がない：空欄 逆効果だった：×